

大震災は日本人に 何を問いかけたか

国家なき市民社会の幻想を超えて

依って立つ地盤が 揺らぎ続けた十数年

日本という国は穏やかで平和的、調和的、協調的で、世界の中でもこんなにもいい国はないのではないかと。私はずっとそのように考えておりました。しかし、ある時期から、自分が立っている地盤がぐらりと揺れていると感じ始めました。自分とはんでもない誤解をしてきたのではないかと、思うようになった。

ったのです。

私ができることをはつきりと自覚したのは平成七年のことではないかと思えます。その年の一月に阪神淡路大震災、また三月にはオウム真理教による地下鉄サリン事件が立て続けに起こりました。阪神淡路大震災では、自治体や首相官邸の初動が遅れ、本来であれば救えたであろう多くの命が失われました。また地下鉄サリン事件では、破壊活動防止法（破防法）という法律があるにもかかわらず、その

適用を見送り、組織暴力への断固たる構えを示すことができませんでした。その辺りから、私の立っている地盤はそれほど盤石なものではない、むしろ軟弱なものかもしれないという気分が私を満たして行きました。

さらに、平成十四年の日朝首脳会談です。この時、北朝鮮は日本人拉致を公然と認め、五人の拉致被害者がようやく帰国したわけですが、それきりです。そこから十年近く経っているにもかか

わらず、解決の見通しは立っていません。

日本政府による拉致被害認定者は十七名ですが、私の同僚の荒木和博教授が代表を務める特定失踪者問題調査会によりますと、拉致の可能性が極めて高い失踪者は四百七十名。ちなみに、その中には拓殖大学の学生とOBも二名含まれております。犯罪国家によって自国民の生命が脅かされているのに、日本という国は何もできていないのです。今の民主党政権には、

渡辺利夫

拓殖大学学長

拉致問題をなんとかしようという
気構えがまるで感じられない。一
体これはどうしたのか。

国家にはいろいろな定義があり
ますけれども、どんな定義をしよ
うとも、領域を守り、国民の生命
と財産を守る。これが最低限の条
件であります。この条件を満たさ
なければ、国家とは言えない。そ
の定義に照らし合わせてみて、わ
が国はどうでしょう。犯罪国家に
よって自国民拉致という、これ以
上もない辱めを受けているにもか
かわらず、辱めを受けているとい
う認識があるのかどうかさえ疑わ
しいのです。

ミュンヘン会談と 酷似する尖閣事件

さて、私は今、国家が国家たる
べき条件についてお話しているの
ですけれども、その事を考える上
で、さらに緊迫感をもって私ども
に迫る事実がございます。ちょう
ど一年前の九月七日、尖閣諸島周
辺海域で起こった中国漁船衝突事
件です。

この事件が起こって、一カ月は



わたなべ・としお ●昭和11年、山梨県生まれ。慶應義塾大
学経済学部卒、同大学院博士課程修了。経済学博士。専門
は開発経済学、アジア経済。筑波大学教授、東京工業大学
教授、拓殖大学教授などを歴任し、現職。『成長のアジア
停滞のアジア』(東洋経済新報社、吉野作造賞)、『西太平洋
の時代』(アジア・太平洋賞大賞)、『新脱亜論』(文春新書)
など著書多数。

かりが過ぎたころ、私の友人が
「渡辺、この中国漁船衝突事件とい
うのはミュンヘン会談と同類のも
のじゃないのかな」と言いました。
そう言われた時、私はそうかもしれ
ないなと思う程度だったのです
けれども、それから一年経って振
り返ってみると、この友人の発言
は「洞察」であったと改めて深く
思われます。

ミュンヘン会談とは一九三八年
にイギリスの首相チェンバレンと
ヒトラーの間でなされた会談です。
当時、一九三〇年代も後半になり
ますと、ヒトラーはあからさまな
対外膨張主義を展開し、オースト
リアを併合し、ドイツ人が多く住
んでいるチェコスロバキアのズデ
ーデン地方を併合するという挙に
出たのです。そこで、チェンバレ
ンがヒトラーと会談します。チェ
ンバレンは、ドイツの要求致し方
なしとみて、むしろ積極的にチェ
コスロバキア政府に対してズデー
デン地方をナチスに引き渡した方
が自らの身の安全のためにいいと
説得する側に回ってしまったので
す。このように、目先の平和と確
執回避を願う宥和姿勢が、結局は

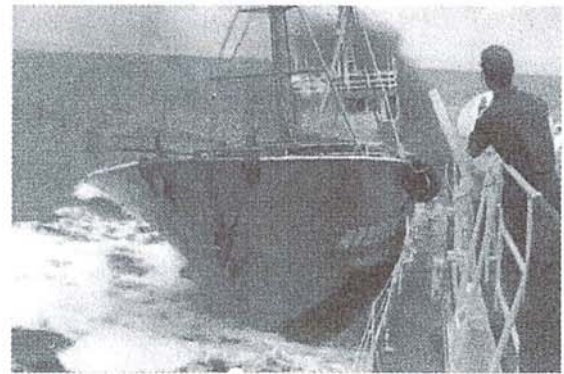
第二次世界大戦という巨大な悲劇
への分水嶺となったのです。これ
がミュンヘン会談の教訓でありま
す。

あれから一年、尖閣諸島漁船衝
突事件に対する日本政府の対応は、
ミュンヘン会談と同類のものであ
った可能性が大きいと考えていま
す。この一年間の日本の指導部の
対応を見ておきますと、中国に強
く抗議するわけでもなく、領域の
警備を強化するために有効な措置
をとっているようにも見えない。
昨年十月のハノイで開かれた東ア
ジアサミットでは、予定されてい
た菅直人―温家宝会談が中国側か
ら一方的にキャンセルされるにま
かせ、翌十一月の横浜でのAPEC
C首脳会議では、菅―胡錦濤会談
がようやく実現したものの、会談
はわずか二十分。菅さんは下を俯
いてメモを読んだだけ。まるであ
んな事件がなかったかのような態
度に終始してしまいました。波風
を立てたせないことだけがベストで
あるかのように振る舞っていたの
です。ミュンヘン会談でのチェン
バレンの態度と重なるのではない
でしょうか。

少しこの事件を振り返ってみましょう。わが国が中国漁船の船長を公務執行妨害容疑で逮捕した後、中国政府は直ちに無条件釈放を要求し、漁業監視船を尖閣周辺海域に派遣してわが国を威嚇しました。また、石垣簡易裁判所が中国人船長の勾留延長を認めるやいなや、訪米中の温家宝首相が船長を釈放しなければ一層の対抗措置をとると公言し、間もなくレアアースの輸出禁止、フジタ社員四人の身柄拘束という挙に出ました。そして結局、九月二十四日、那覇地検が記者会見で「日中関係の将来に配慮して」船長を釈放したという次第です。

外交に責任を有しない地検が「日中関係に配慮して」などという理由を付けることはあり得ない話です。本来、責任を負うべき官邸が、地検に圧力を加え、姑息な幕引きを図ったであろうことはみえみえであります。

この日本の指導部のやる気のなさを中国の指導部は見逃しませんでした。すかさず謝罪と賠償を要求してきた。謝罪と賠償を要求するのは日本であるはずなのに、事



尖閣事件

実は全く逆になってしまった。しかし、その逆になってしまったことについて「中国はケシカラン」と非難しても仕方がないわけです。外交とは、そもそもそのようなものだからです。「外交とは武器を用いない戦争である」と言われますが、相手が引けば押す。得られるものは何でも得て行く。これが外交の原則です。

その意味では、中国という国は「立派な国」です。事件後、成都では大規模な反日デモが起こり、日本のスーパードが襲撃対象となりました。これは確実に官製デモだろうと私は見えますが、要するに中国は国民運動まで起こして、日本を追い詰めて行ったわけです。

今の日本が見習わなくてはならないのは、何が何でも国益を確保しようとするそうした姿勢ではないでしょうか。まるでそんな事件がなかったかのように振る舞う日本の指導部の態度は、全く愚かしいと言わざるを得ません。

もとより、中国は西沙諸島や南沙諸島を囲む南シナ海の制海権をほぼ握りつつあり、東シナ海でも影響力を拡大させております。昨年の事件はこうした中国海洋権益の拡大行動の一環であるわけですが、事件から一年を経た最近では、中国の航空機が日中間線を頻繁にまたぐようになっていきますし、漁業監視船が領海すれすれの接続水域を徘徊して、時に領海に侵入する事態も起きています。非常に危うい情勢です。

はつきりしているのは、尖閣事件後の日本の指導部の軟弱な対応が、中国の行動をさらに助長させているということです。

国家と共同体を 露わにした大震災

ここまで私は、国家観念を希薄

化させ、日本が国家としてまともな対応をしていないということへの嘆きをお話してきたわけですが、そうした中で、まぎれもなく「国家」というものの存在を露わにしたものが、三月十一日に発生したあの東日本大震災です。

振り返ってみますと、この六十年以上、この国ではなんとも緊張感のない平和が続いてまいりました。こんなことは世界の歴史の中にあるかどうかとさえ思えるほどのパーフェクトな平和であります。その平和の中で、多くの日本人は、国家あるいは共同体というものにあまり価値を置かないようになってしまった。大事なものは個人、自由な「個」として生きることが善きことだと。むしろ、国家や共同体は、そのような自由な「個」を拘束するものだというネガティブな価値付けしか戦後の日本では与えてきませんでした。

特に民主党の政治家やその周辺の人々は、「国家」という言葉を口にしたり、「国民」ではなく「市民」、あるいは「地球市民」「東アジア市民」などと空想的な用語を弄んで

います。私はそのような気分のこととをポストモダンズムと呼び、そんな軽薄で安穩な気分では、ナシヨナリズム鬱勃たる中国、ロシア、朝鮮半島などの周辺諸国にはとても対抗できないと繰り返し主張してきました。

そこに東日本大震災が起こったのです。自衛隊、消防、警察、海保、医療従事者など、救援に当たった関係者の自己犠牲を厭わぬ献身、あの姿に感銘を憶えなかった人は少なからうと思います。例えば、自衛隊は総人員の約半分、十万人七千人を被災地の救援に当たらせ、生ける者は全て救出し、死せる者は瓦礫の山を掻き分けて捜し出し、丁寧に埋葬しました。このような自衛隊の献身的な姿の中に、私は「国家」の存在を強く感じました。民主党が言うところの「国家なき市民社会」などという物言いがいかに空虚で、戦後の日本人が礼賛してきた「個」というものがいかにも頼りない儂い存在だったかということとは明らかであります。

その共同体なるものは、現実にはもう日本の隅々において、あと一世代もすれば消えてしまいかねないほど薄弱なものとなっておりませんが、しかし、あの東北の農漁村の中には未だしなやかに生きていた。私がそのことを強く感じたのは、テレビでこんな光景を見たときです。

震災後、多くの人が避難所暮らしを余儀なくされましたが、そこで提供される食事はペットボトルやおにぎりなど冷たいものばかりでした。まだ雪の降っている時期でしたので、そういうものばかり食べていると、温かいものを食べたいと思うのは当然です。そんな時、救援ボランティアが温かいうどんを持ち込んだ。そして呼び掛けに応じて、百人くらいの人たちが列を作りました。ところが、うどんは三十杯くらいしかない。しかしそのことが分かると、一番目にもうどんを受け取った人は、私より困っている人がいるはずだと言って次の人にこれを渡す。二番目の人ももっと困っている人がいるはずだと次の人に渡す。そうやって次々とバケツリレーのように渡

して行って、最後にはそのコミュニティの一番の弱者である子供と老人に温かいうどんが行き着いたわけです。その光景を見て、私は胸を詰まらせました。

そもそも人間というものは、血族を中心とした共同体がなければ人生を全うすることができない。こんなことは全く当たり前のことですが、この当たり前のことを日本人は長く忘れてきたのではないのでしょうか。共同体の重要性を、天の配剤か何か分かりませんけれども、「お前たち、思い返せよ」といわんばかりのインパクトで以て、あの震災は私達に迫ったのではないのでしょうか。私はそのように受け止めて、共同体を共同体たらしめている精神というものの、原理というものを蘇生させ、再生させねばならないと考えています。先程、私は国家という言葉を強調しましたが、真つ当な共同体に支えられずして、真つ当な国家というのはあり得ないからです。

震災後の政権中枢部の対応は、その後の数々の混乱を生み出した元凶と言えるほど、あまりにも無様なものでした。しかし、あれほ

ど無様たりえたのは、グラスルーツの共同体がしっかりしていたからだと私は思うのです。

普通はあのような事が起これば、暴動や略奪が起きないはずがない。私がよく知っているアジアの開発途上国はもちろん、アメリカさえそうです。だけれども、わが国ではそのようなことが起こらず、ごく自然に規律と秩序が守られた。政権があればほど無様な対応をしておきながらそれでも倒れずに済んだのは、東北の人々のそうした忍耐強さや相互扶助の精神、またそれらを育んだ共同体の存在のゆえだ、私はそのように考えたのです。

先程の尖閣事件も、日本の国民が「国家」というものに目覚める一つの転換点になったのではないかと思います。東日本大震災はより大きな意味で、国家と共同体の重要性を日本の国民に悟らせた重大な出来事だったのでないでしょうか。

「しなやかな諦観」 を持って生きよう

では、この二つの出来事を契機

として、日本人は今後どのような精神を以て生きていかなければならないのか。そのことを私はずっと考え続けております。ここでは二つのことを申し上げたいと思います。一つは、「しなやかな諦観」を持って生きようということです。

日本は世界でも有数の天変地異の国です。日本列島は太平洋プレート、北米プレート、フィリピン海プレート、ユーラシアプレートという四つのプレートがジグゾウパズルのように重なり合う上に乗っかっている。頻繁に地震が起こり、時には大地震、大津波も起こる。私たちの祖先はそうした国土の上で辛苦を続けながらも、今日まで生き存えてきたのです。

報道によれば、東日本大震災の次に恐れられているのは西日本での大震災です。地層のズレの反転が巨大なエネルギーとなつて東海、東南海、南海の三つの地震を連鎖させて起こるとされ、この連動型地震が今後二十〜三十年の間に起こる可能性は百パーセントに近いと言われております。もしそのような巨大地震が太平洋ベルト地帯という日本の大動脈を襲えば、い

かに立派な防災計画を施したところで、完全にこれを防ぐなどということはできません。

私は、そうした防災計画は必要ないなどと言っているのではありません。合理的に防災のありようを追究することはもちろん必要なことです。しかし同時に、この世の中には防ぎようもない厄事が存在する、そういう「しなやかな諦観」の構えを持たねばならないと思うのです。

人間は安寧な自然の中に生まれ落ちたわけでは決してない。むしろ、私どもは過酷な自然の中に、遅れて生まれ来た存在なのです。天変地異によつて民族の半数が消滅したこともあつたかもしれない。しかし、そうであっても生き残つた人々は、次の世代へと日本人の血を継いでいかなければならない、そう考えて必死に生き存えてきたのでありましょう。天変地異だけではありません。幕末維新や第二次大戦での敗戦など、歴史上、日本人は何度も国家存亡の危機に見舞われながらも、それを乗り越え、生き存えてきました。

そのエネルギーはいったいどこ

から生まれしてきたのでしょうか。家族や友人など親しい人々の多くが死せる者となり、そのことを怨み、あるいは悲しみにうちひしがれながらも、わずかに残された生ける者に生命力を湧き立たせてきたものはいったい何だったのでしょうか。

そうした時に生命力を湧き立たせてきたのは鎮魂、死せる者の魂を鎮めるといふ儀礼・行為だったと思うのです。個々の生命体は必ず滅します。しかし、死せる者の肉体と精神は遺伝子を通じて次の世代に再生し、永遠なる生命として継承されて行きます。その個々の生命体の集合が民族です。私は、死せる者の魂を鎮めるといふ人間の営為の中に、個々の生命力、またそれを集合した民族の生命力を漲らせる力があると思うのです。

しきしまの大和心のををしさはことある時ぞあらはれにける

これは日露戦争の戦端が開かれたときに明治天皇がお詠みになつた御製ですが、私たちは苦境に陥つた時ほど、今生きて在ることの

意味をいよいよ鮮やかに確認し、この明治天皇のお歌のように、いよいよ生命力を漲らせて民族の血脈を継いで行かなくてはならないと思うのです。

闘争本能の喪失を憂う

もう一つは、闘争心を持って生きるということです。

もう亡くなられて久しいのですけれども、京都大学に会田雄次という先生がおられました。先生が晩年、ある新聞に寄せられたエッセイの中で、関西で立て続けに起こつた火事について触れられたことがあります。一連の火事では、母親と子供が家ごと焼け死んでしまったのですが、先生はどうしてこんな痛ましいことが続くのかと嘆いた上で、次のような想像をされていました。

ひよつとして、母親は火をみて立ちすくみ咄嗟の行動を取れないまま火に巻かれてしまったのではないか。どうして手の届くところにある花瓶やら椅子やらを投げつけてガラス戸を打ち破り、子供を



大震災で壊滅した宮城県女川町(5月12日撮影)

避難させてやれなかったものか。学校でも地域社会でも他人と競い争うことなど悪であるかの如く教えられてきたため、危機からわが子を守る「闘争本能」が母親から失われてしまったのではないかと、この「闘争本能」ということについて考える上で、もう一つ、私の少年時代のこともお話しておきたいと思います。

私は山梨の甲府で生まれ育ちま

した。甲府は米軍の空襲によって徹底的にやられまして、郊外にある母の里に逃げ込みました。しかし、田舎の小学校では、街の方からやってきた私は異分子だったらしく、随分いじめられた記憶があります。ところが、それを心配した兄が、ある時、鋭く研いだ鑿を私のランドセルにしのばせたのです。もちろん、私はその鑿を級友に向けてはなかったのですが、それでも、どうもランドセルの中に鑿が入っていることは皆に分かったらしいのです。それ以来、私をいじめる者は誰もいなくなり、そのうちに私に阿るような態度をとる者まで現れました。

人がこの世に生まれ落ちた以上、他人と協調して生きて行くことは大切なことです。しかし同時に、不合理なことに対しては闘う気概を持たなければ、人生は全うできない。

大事なことは、協調することと闘うことと、この両方を併せ持つということとです。ところが、

戦後の日本においては、闘うことがまるで悪いことのように捉えられてしまったのです。特に国家関係を考える場合において闘争の觀念が完全に欠落してしまいました。

国家というものは、他国と協調したり提携したり結託したり、同時に欺いたり脅かしたり戦争に打って出たりもするわけです。本来はこの両方を併せ持つことがどうしても必要なのですが、他と協調し提携することだけが善しとされ、他を脅かし欺き争うということについては悪しきこと、あるいは考えてはならないこととされてきました。憲法からしてそうであります。

しかし、そのような絵空事で国家が長期的に存続していけるはずがない。私は先程、戦後六十何年間、日本はパーフェクトな平和を享受してきたと申しましたが、厳密に言えば、この平和は単なる「擬似平和」だった、ただのラッキ―だったに過ぎないのではないか。日本の平和を守る意志が堅固だったからでも、憲法が平和主義を掲げていたからでもなく、ただアメリカという覇権国家に身を委ねて、平和を享受してきたに過ぎないの

です。

国家はエゴイスティックなものだ。だから、むしろ個人と個人の関係を尊重し合い、友情を深めることによって国家の関係が良くなる、というふうに言いますけれども、そのようなことはあり得ない。国家には国家を動かしている原理があり、それは個人を動かしている原理とは違うのです。そのことにわれわれは目覚めなければならぬ。

もちろん、協調や提携も必要な時があることは十分認めますけれども、同時に欺いたり脅かしたり戦争に打って出るといふ決意を持って臨まなければ、国家の独立を保ち、他国との間で対等な国家関係を構築することはできません。弱者に「生存空間」はない——これが国際政治の時空を超えた真実であります。そういう成熟した感覚を持つことが、これからの日本にはどうしても必要だということに最後に申し上げて終わりにしたいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

(本稿は、九月十八日、日本政策研究センター第二十三回全国研修会における講演の抄録です。文責・編集部)